息を呑む･･･

（文京区小石川後楽園）

庭園の入口を入って、
まず目に飛び込んでくる巨大な白い物体。

平日の昼間というのに庭園の見学者は引きも切らず、入場料を払って門をくぐる。しかし、その先に広がるものは、広々とした日本庭園を圧してあまりにも存在感ある巨大なたまご、ビッグエッグである。人々はとくに口に出さず、感嘆の声もあげず、園路を進むが、この威容に気がつかないわけではあるまい。しかし、彼らはお金を払って日本庭園を見に来たのである。東京ドームなんかに負けてたまるか！払った金額分楽しませてもらうよ！そう意気込むわけではないだろうが、無言のまま視線を下げる。景観を妨げるものを見まいとするように、うつむき加減に園路を巡るのである。

門からすでに予感はするのだが、これほどとは･･･

公園と日本庭園のちがい

（江東区木場公園と清澄庭園）

公園のまわりにビルがあるのと日本庭園のまわりにあるのとでは意味が違う！

現在日本の法律では、公園も空き地もそして文化財庭園のようなランドスケープ空間も、すべて「空地（くうち）」という一括りにされている。その周辺では建築物を建てる際に斜線制限（隣地への日あたりを考慮して建物をセットバックせよ、という規定）を緩和されるため、「空地」のまわりには高い建物が建てられるわけである。公園や文化財庭園に日が当らなくてもよいのか？そして、江戸の文化財庭園のような「ランドスケープ遺産」のながめが周辺のビルのせいでだいなしになってしまうのは、ほおっておけない問題である。

日本庭園の特徴１　縮景

（文京区小石川後楽園）

理想の世界を表現した小さな宇宙

日本庭園のながめのつくり方のひとつに、縮景（しゅっけい）という方法がある。富士山や中国などの有名な風景、さらには神仙境のような架空の世界を庭の中に表現するのだ。表現する風景の象徴的な部分を実際の寸法の 1/300～1/1000 くらいに縮小して、その場に行ったような境地を楽しむのである。中国は杭州西湖の西湖堤は、江戸時代教養ある上流武士たちに好んで表現された風景である。

しかし、1/300～1/1000 に縮小された夢の空間と、原寸スケールのビルとが隣り合わせに建つ光景は興ざめである。

↑西湖堤

←京都大堰川の風景を模したあたり

日本庭園の特徴２　借景

（台東区上野公園清水の舞台）

江戸の段丘に立地するながめ

借景というと京都の円通寺や無隣庵をみてご存知の方も多いと思うが、江戸の空間にもこの手法はよく用いられてきた。上野の寛永寺清水観音堂は、上野の山を比叡山にたとえ、不忍池を琵琶湖に見立てた風景を見せていた。（実際の清水の舞台は比叡山にはないし、琵琶湖は見えない、というのはご愛嬌で）

不忍池を庭園内に取り込んだ構成で庭を広く雄大に見せていたが、どちらも現在ビルが建ち並び、樹林で視界を遮っている。

←江戸名所百景に描かれた清水観音堂

木を見て森を見ず

（港区表参道）

有名建築家でも･･･

ひとつひとつの建築物は美しくとも、少し離れて群として見ると、まったく美しくない街並になっていることがある。建物のスケール感や素材感（テクスチャー）は、思ったよりも周辺環境に影響を及ぼす。にもかかわらず、周辺環境に整合するように計画することが重要視されていない。建築雑誌などに取り上げられるときも、建築物単体である。建築物がオブジェクトとして扱われることに慣れてしまっている。